

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	佐 藤 智 照
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>第二言語としての日本語文の音読における語彙情報と意味情報の処理 —単語の音韻符号化の高速性・教示の種類・音読回数が注意配分に与える影響—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 松 見 法 男</p> <p>審査委員 教 授 中 條 和 光</p> <p>審査委員 教 授 深 澤 清 治</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、日本語学習者が日本語文を音読する際の言語情報処理について、読みの過程における注意配分の観点から明らかにすることを目的とする。具体的には、単語の音韻符号化の高速性と読み方に関する教示の種類、そして音読回数の3つの要因を取り上げ、これらの要因が音読時の注意配分に与える影響について、文の記憶成績と読み時間を測度とした実験的検討を行う。</p> <p>論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>第1章では、言語情報処理と注意配分の関係について述べた。音読時の言語情報処理を扱った先行研究を、文や文章の記憶成績を測度とした研究と、文章の読み時間を測度とした研究とに分けて概観した。記憶成績を測度とした研究では、「文がどのような単語で表現されているか」という表現形態の記憶と、「文がどのようなことを意味しているか」という意味内容の記憶に基づいて、音読時の注意配分が検討されてきた。読み時間を測度とした研究では、「繰り返し読み」による読み時間の短縮の生起メカニズムに焦点が当てられ、読み時間の短縮が、「先行読み」で形成された単語レベルとテキストレベルのいずれの表象利用によって生じるかを調べることで、音読時の注意配分が検討されてきた。これらを踏まえ、本研究では、音読時の注意配分に影響を与える要因として、単語の音韻符号化の高速性と読み方に関する教示の種類、そして音読回数の多寡を取り上げ、3つの要因が音読時の注意配分に与える影響について予測した。</p> <p>第2章では、単語の音韻符号化の高速性と教示の種類が音読時の注意配分に与える影響を調べるため、文の記憶成績を測度とした2つの実験を行った。実験1では、音読と黙読を比較した。実験2では、音読課題において音声重視教示と意味重視教示を設けた。その結果、以下のことがわかった。(a) 第二言語としての日本語文の音読は、黙読と比べて、語彙の形態・音韻情報という形式的側面の処理に多くの注意を配分する課題であること、(b) 単語の音韻符号化が高速の学習者は、低速の学習者と比べて、文が表す意味情報という意味的側面の処理に多くの注意を配分できること、(c) 「繰り返し読み」ができる場合、音読では、繰り返す過程で文の意味的側面の処理に多くの注意が配分される可能性が高いこと、(d) 読み方に関する教示の種類によって、音読時の注意配分は異なるが、それは単</p>			

語の音韻符号化が高速の学習者においてのみ観察されること、の4点である。

第3章では、単語の音韻符号化の高速性と教示の種類、そして音読回数の3つの要因が、音読時の注意配分に与える影響を調べるため、文の読み時間と読み時間の短縮における促進量を測度とした3つの実験を行った。実験3では、単語の音韻符号化の高速性と教示の種類を操作した。普通の文を2回、繰り返して読ませる条件と、普通の文の構成単語（形態素）を無作為に並び替えた文を1回読ませた後、単語の並びを元に戻した普通の文を読ませる条件とを設け、両者の2回目の音読時間と促進量の比較から、単語レベルとテキストレベルの表象利用の効果を検討した。次の2つの実験では、音声重視教示（実験4）と意味重視教示（実験5）を設定し、各条件下での音読時の注意配分に、単語の音韻符号化の高速性と音読回数（1回条件、3回条件）が与える影響を調べた。1回条件における2回目の読み、および3回条件における4回目の読みの際に、「先行読み」で呈示された文と比べて、①意味内容だけの重なりが多い文、②単語だけの重なりが多い文、③意味内容と単語の重なりが少ない文、を読む条件を設け、各条件の音読時間と促進量の比較から、単語レベルとテキストレベルの表象利用の効果を検討した。その結果、以下のことがわかった。(a) 単語の音韻符号化が高速の学習者は、文が表す意味情報の処理に多くの注意を配分する一方、それが低速の学習者は、語彙の形態・音韻・意味情報の処理に多くの注意を配分すること、(b) 単語の音韻符号化が高速の学習者は、音読回数にかかわらず、教示に沿った注意配分が可能である一方、それが低速の学習者は、音読回数の増加に伴い、文が表す意味情報の処理に漸進的に注意が配分できるようになるため、音読回数が多いときのみ、注意配分の操作が可能であること、の2点である。

第4章では、実験1から実験5までの結果をまとめるとともに、単語の音韻符号化の高速性と教示の種類、音読回数の3つの要因が、音読時の注意配分に与える影響について、先行研究の知見と本研究で得られた知見を統合して論じた。そして、本研究の結果に基づいた教育的示唆を導出し、今後の発展課題を述べた。

本論文は以下の3点で高く評価できる。

1. 第二言語の文の音読における言語情報処理の過程を、注意配分の観点から捉え、これまで扱われなかった単語の音韻符号化の高速性や音読回数の要因が、音読時の文の記憶成績ならびに読み時間に与える影響について、教示の種類との関わりにおいて検討した。
2. 音読が文の語彙情報と意味情報の記憶に促進効果をもたらすか否かを調べるとともに、文の音読を繰り返す活動に焦点を当て、音読による読み時間の短縮の生起メカニズムを明らかにした。
3. 日本語学習者に、意味内容の理解を伴った文の音読を遂行させるためには、音読の際に意味重視教示を与え、音読を繰り返す回数を調整することが重要であるという教育的示唆を導出した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成26年2月14日